The 63rd Annual Meeting of Japanese Society of Clinical Physiology

第63回日本臨床生理学会総会

ランチョンセミナー1

Luncheon Seminar 1

日時 2026年11月28日(土) 12:00〜12:50

会場 第1会場 ライトキューブ宇都宮
小会議室101・102

〒321-0969 栃木県宇都宮市宮みらい1-20



心臓と血管の連関を意識した高血圧診療

座長 豊田 茂 先生

獨協医科大学 心臓・血管内科/循環器内科 主任教授

演者 清水 一寛 先生

東邦大学医療センター佐倉病院 循環器内科 准教授

本セミナーは整理券制ではありません

直接会場にお越しいただき、先着順にご入場いただきます。
なお、お弁当数・席数には限りがありますので予めご了承ください。

共催：第63回日本臨床生理学会総会／フクダ電子株式会社

ランチョンセミナー1

心臓と血管の連関を意識した高血圧診療

清水　一寛
東邦大学医療センター佐倉病院 循環器内科 准教授

高血圧診療の目的は、単に血圧値を低下させることではなく、心臓および血管の臓器障害を予防・改善し、将来の心不全や心血管イベントを抑制することにある。特に左室肥大は代表的な心臓標的臓器障害であり、その退縮は重要な治療目標である。一方、心臓に加わる後負荷は上腕血圧のみでは十分に評価できず、動脈スティフネスを含めた「心臓と血管の連関」という視点が重要となる。

Cardio-Ankle Vascular Index（CAVI）は、測定時血圧の影響を受けない動脈スティフネス指標として2006年に原理論文[1]が報告され、現在は日本のみならず世界中からエビデンスが報告されてきている。

CAVIは、心臓と血管の連関という視点からの高血圧診療に新たな視点をもたらしてきた。われわれは、高血圧患者に対するサクビトリルバルサルタンの治療により血圧低下に加えてCAVIが改善し、左室肥大や左房機能が改善することを報告した[2]。また、心エコーとCAVIを用いた縦断研究では、CAVIの変化が左室形態変化と関連することを示し、血管機能の改善が良好な心筋リモデリングに寄与する可能性を明らかにした[3]。

本講演では、これらの知見を踏まえ、「心臓を診るには血管を診る」という観点から、高血圧診療におけるCAVIの臨床的意義を概説する。さらに、近年開発したinnovative CAVI（iCAVI）[4]についても紹介し、座位で簡便に測定できる新たな血管機能評価法として、その将来性と高血圧診療への応用について展望したい。iCAVIは従来のCAVIと同様の理論に基づきつつ、より簡便な測定や日常診療・在宅での活用につながる可能性が期待されている。本講演では、高血圧診療における血管機能評価の未来についても展望したい。

参考文献

1. Shirai K, et al. A novel blood pressure-independent arterial wall stiffness parameter: cardio-ankle vascular index (CAVI). J Atheroscler Thromb 2006; 13:101–107.
2. Shimizu K, et al. Potential Effects of Sacubitril/Valsartan on the Cardio-ankle Vascular Index in Hypertensive Patients. Intern Med. 2025 May 15;64(10):1470-1475.
3. Shimizu K, et al. Impact of Arterial Stiffness on Cardiac Geometry. Int Heart J. 2025;66(3):449-455.
4. Shimizu K, et al. Clinical Potential of Arterial Stiffness Measured from the Aortic Valve to the Brachial Artery in a Seated Position. Am J Hypertens. 2026 Mar 1;39(3):407-415.